

インド留学記

その9

忘れえぬ人々

(2)



教授 岩 大 沢 金 助 島

売春宿での交渉の達人T

私にはないが、インド留学にあたって次のようなアドヴァイスをしてくれた先生がいたという。「若くして単身一年二年とインド留学するのだから、セックスのことでいろいろ悩むこともきつとあるだろうと思う。インドでセックスをどうするのかよく考えておいたほうがいい

よ」と。インド留学後この話しを聞いて、「なんて人間的でいい先生だろう。私もこんなアドヴァイスを受けてからインドへ行きたかった」と思った。

ともかく、このアドヴァイスにあるような問題が起きるかも知れない、などということは全く念頭にもなくインドに来てしまった私の場合には、経験的な形でいろいろと紆余曲折を経て

しまうことになるのであるが、その最初がTとの出会いだった。

Tは北インドのビハール州出身の博士課程の学生で、寮でも同じ階でよく遊びに行ったり来たりしていた。いいやつなのだが、目元に好きな感じがあつて、「こいつは好きものに違いない」という印象を与える奴だった。

留学後半年位は、異なる環境、慣れない言葉と人々、なかなかついていけない授業等々と余裕がなく、性的な欲求自体があまり湧いてこない感じだった。だが半年ほどたつてふつと余裕がでてきたときが危なかった。日頃からわい談相手のTと話しているうちに、ついつい盛り上がってしまったのだ。「よし、シティー・ポストの裏へ行こうぜ」(プーナ市の中央郵便局の裏手がいわゆる赤線地帯になっているのである)という事になったのである。

こういうときは、なんと言うか、男どうしの

間では、いったん盛り上がったらもうおりられないというか、そこでおりたら男がすたるというか、そんな雰囲気があるもので、エイツとくりだすことにした。それに日本では、小説や映画で遊廓や赤線地帯について知ってはいても、売春禁止法以降の世代としては現実には全く知らないので、好奇心満々でもあった。

シティー・ポストの裏に着いた。細い路地の両側に二階建ての建物が並んでいる。二階はベランダ形式になっていて、そこから女性たちが路地を通る男たちに声をかけている。日本の映画で見た赤線地帯とそっくりだ。なんだか気分が浮き浮きしてくる。路地に立っていると、日本では「やり手ばあ」だなどという風情のおばあさんが近づいてきた。Tの交渉が開始される。もちろんヒンデイ語だ。あとでなんと言ったのか聞いたら「われわれはジェントルマンであるからして、いいところに案内するように」

と言ったとのことであつた。こんなところに来てジェントルマンもねえだろう、と笑つてしまつた。

どうも一階よりも二階のほうが高級のようで、二階のほうに案内された。二階に上がるとすぐに、ちよつと広めの部屋があり、そこにはレザーばりのソファアがいくつか並んでいた。待ち合い室なのだろう。男たちが何人が座つており、女たちが相手をしていた。奥のほうから男と女が出てくると、入れ替わりに待ち合い室の男と女が入っていく。好奇心にかられて奥のほうを覗くと、ベット一つおけるくらいの広さの小部屋が五つほど並んでいた。大きな部屋をベニアで仕切つて作つたもので、小部屋には天井はなく、音は筒抜けである。友達連れて来たのだろうか。隣の男と声を掛け合つて男の友情を確かめあいつつ行つていると思われる声が聞こえてくる。なんて即物的な世界なんだろうと

ゲンナリした。日本の小説や映画で想像していた情緒的世界とは全く異なつていた。あれだけ盛り上がりつても気味の悪いことに思えてきた。

さらにこのような気分到最后に追い打ちをかけたのは、ソファアに寝ていた三、四歳の女の子だつた。「こんなところでセックスしても子供が生まれることがあるんだ」と思つたらもう駄目だつた。盛り上がった男の友情は袖にしてサツサと逃げ出すことにした。Tたちが先に小部屋に入ったのを見計らつて金だけはいらぬ（十五ルピー＝四五〇円）、Tたちを表で待たせた。逃げ出したと言ふわけにもいかず、盛り上がりつて表にでてきたTたちに適当に話をあわせながらの帰り道は、全く二重に最悪の気分だつた。

日本語の名人ゴーカレ

留学後まもなく、寮に一人のインド人が訪ねてきた。日本語をとつても流暢に話すインド人だ。

「日本語を初めてどれくらいですか」と聞くと、「一年ちよつと」だと言う。その答は、英語を十年やっても喋れないで困っていた私には驚異だった。即座に尊敬してしまうことにした。それがゴーカレー (Vivek Gokhale) との最初の出会いだった。ただ敬語だけはまだ不自由のようで、日本人にとってはちよつとぞんざいな日本語を喋っていた。

プーナの日本人の中には、「日本人をつかまえては日本語の練習をしている」とか、「無礼なやつだ」と言つてゴーカレーを嫌う人もいたが、私にはそんなことは気にならなかった。私も日本では留学生をつかまえてタダでさんざん英会話の練習をしてきたほうだし、アメリカ人やイギリス人にたいしてすぐ、「あなた方は生まれたときから英語を喋っているんだからうまくて当然じゃない。ネイティブ・スピーカーじゃないものが苦勞して英語で喋つてんだから、多少変

な英語でもちやんと分かれよ。こつちが聞いて分かんなかったら分かるように喋れよ。それが礼儀じゃないか。あなたたちが日本語喋るときにはこつちはちやんとそうするからさ」とわめきたくなつてしまうほうなので、彼のぞんざいさは全く気にならなかったのである。

留学中二年ほどつきあつているあいだに、教えないのに彼の日本語はどんどんうまくなつていった。見るまに敬語もきれいに使い分けるようになり、語学を体得するということがういうことかというような見本のような存在だった。漢字も独学でどんどんマスターしていった。しかし最後まで、インド人特有のおしつけがましさのようところは消えなかった。そこだけがインド人が日本語を話しているという感じのするところだった。

ところが、その後年かしてインドで再び会つたとき、あのおしつけがましさのようなもの

Sankian



はすっかり消えていた。すくなくとも日本語を話しているかぎりにおいてはそうだった。聞いてみると、一年間日本に研修にいつてきて、日本との技術提携をしている会社で通訳および技術文書の翻訳者として働いているとのことである。日本にきたインドの留学生で日本語がうまくなった人もそうだけれど、日本語をマスターするということは、言葉の背後にある敬語体系や柔らかく曖昧な物言いなど、単に言葉を修得するということを超えて、言葉の背後にある人間関係のもちかたをはじめとする文化を修得するという面があるようで、インド人がその立ち居振る舞いすべてすっかり日本人になってしまおうのである。日本人になってしまおうというのが言い過ぎなら、少なくとも日本人好みのインド人になってしまおうのである。

従って一方では、今問題になっている外国人労働者の問題も、日本語を文化的背景込みで

つちりマスターさせるようなシステムを作れば、このゴーカレー氏に見られるように、ある程度は日本国内での文化摩擦の問題は解消するのではないかとも思われるのだが、しかし他方では、少なくとも私はゴーカレー氏のような語学の達人にはなりたくないと思った（もちろんなれもしないだろうけれど）。つまり、インドの言葉を話しているときのゴーカレーと日本語を話しているときのゴーカレーという二人の人格がいるような気がして、そうはなりたくないと思うのである。私はあくまでジャパニーズ・イングリッシュで勝負しよう。どうしてもこうしか思えないのである。

ベトナム人留学生M

寮の私の斜の前の部屋にベトナム人学生Mが移ってきたのは、留学後半年ほどしたころだった。なんとなく雨蛙に似た顔の、笑うと目元が

くずれてひとなつっこい感じになる学生だった。インド政府の奨学金をもらって、イピドに社会学を勉強に来たとのことであつた。ベトナム（当時の南ベトナム）は第二次世界大戦以前はフランスの植民地だつたこともあつて、当時はアメリカの影響下にあつたものの、あいかわらずフランス語のほうが盛んだとかで、英語はこれでもいいだろうかと私が心配になるほど喋れなかつた（ただし一年くらいで、授業も含めてほぼ支障がないほどになつた）。

インド人の人あたりの強さと違って、日本人と顔も似ていて物腰の柔らかいMにははじめからとっても親しみを感じた。部屋に遊びに行くと、お茶をだしてくれるのだが、それはインド的な紅茶ではなくて、緑茶だつた。日本とは違って、お茶をこさずにそのまま茶碗に入れ、その上からお湯を注いで、お茶が茶碗の下に沈むのを待ってきわらずみを飲むという飲み方だつ

た。ときには、そのお茶に花なんかを浮かべてだしてくれるのだが、そのへんの感性が、とても中国的というか日本的というか、とにかくすつかり気に入ってしまった。

また、ベトナムは大乗仏教の禪が盛んとかで、Mも禪寺で修行したことがあつて、漢字がよくできた。英語では語彙不足で話しが通じないところは漢字で補つて話しをした。日本人とベトナム人が漢字で話しが通じるなんてとても意外だつた。なんだか、中国文化圏に属する両国は……なんて感じて、やっぱり中国文化って偉大だつたんだ、などと思つた。

しかしそんな平穏な日々は長くは続かなかつた。Mが暗い顔をしていることが多くなつてきたのだ。ちょうどベトナム戦争が終結に近づいてきた頃で、家に手紙を出してもぜんぜん返事がこないとのことであつた。そんな日々が続いたのち、ベトナム戦争が終結した。ベトナムは

共産主義の国になったのだ。カンボジアの大使の息子だとか言つて羽振りの良かった留学生はすでにインドから消えていた。おそらくフランスへ渡つたのだろうということであつた。南ベトナムが資本主義国であり続けられ、Mがインドで学んだ社会学は帰国後役に立つたかもしれない。しかし国の情勢はまったく変わつてしまつたのだ。相変わらず本国の家族との連絡はとれないと言ふ。いったいMはどうするのだろうか。ひと事ながらとても気になつた。

ある日Mが部屋を訪ねてきた。これからは社会学では駄目だから農学をやるといふのだ。それもインドでは今後資金的に継続の見込みがないので、まずフランスに知り合いを頼つて行くといふのである。フランスに行く金があるのかと聞くと、パンチガニ（プーナ近くの避暑地）にあるモラル・アーミー（第一次世界大戦以降に、二度と戦争が起きないようにと、武器によ

る武装ではなくて道徳による武装を説いてヨーロッパで成立した組織）の援助で、フランスに渡るのでとのことであつた。

もし私が同じ立場だったら、ふと考えた。日本と連絡がとれなくなつただけでパニック状態だろうなと思つた。とてもこんな風に冷静に、今後のことを考えて進路を変更し、ちゃんと手を打つていくということなどできないだろう。これまでさまざまに外国に虐げられてきた国の人間はこんなに強いのかと感心した。決して怒つたり呪つたり騒いだりしないで、きちんと次のことを考えている。風にそよぐ葦の強さとも言おうか。ベトナムがアメリカに勝つた理由がなんとなく分かつたような気がした。

その後Mからは、オランダで農業の勉強をしているという便りがあつたきりで、連絡は途絶えてしまつた。今も風にそよぐ葦の強さで元気に生きていることを信じている。